
「モニエ街」連作にみるマネのリアリズム
—近代都市パリとその社会への画家の眼差し—

本発表は、1878年に制作された「モニエ街」連作における、エドゥアール・マネ晩年の広角かつ等価的な視線を指摘するものである。

道路舗装を描いた《舗装工のいるモニエ街》と1878年6月30日の祝祭日を描いた《旗で飾られたモニエ街》の2点の油彩画およびその習作をも含む「モニエ街」連作関連作品群は、印象派的手法や、労働者階級の描写によるリアリスティックまたはナチュラリスティックな特性など、マネの芸術上の多様性を見出すことのできる重要な作品群である。

「モニエ街」連作に関する先行研究では、《旗で飾られたモニエ街》に描かれた松葉杖の男に関する考察や、1878年という年の意味づけに関する考察が多くなされてきたものの、《舗装工のいるモニエ街》や習作を含む連作全体の制作過程や制作意図に関する研究は殆どなされていない。従って本発表では、連作としての「モニエ街」全体を多様な視点から詳しく分析し、そこから浮かび上がってくるマネのリアリズムの特性を明らかにする。

具体的には、「モニエ街」連作に関連するスケッチや習作の分析を出発点とし、都市の街路を構成する多様な社会層のあり方に注目するスケッチが多く描かれ、それらを寄せ集める形で2点の油彩画が構成された制作過程と、都市の近代化を暗示する街路の変化をより明示的に表すために連作の形式がとられた経緯とを、まず明らかにする。

そうした検討を踏まえた上で、次に、完成作の分析を行う。《舗装工のいるモニエ街》と《旗で飾られたモニエ街》の両作品において強調された労働者階級やその労働は、暴動や革命を、とりわけ1878年という時期を考慮するならば、普仏戦争やパリ・コミューンを暗示するものであるが、それとともに、近代都市の社会構造をも明らかにしていると考えられる。即ち「モニエ街」連作は、狭い視野で見れば過去の暴動と根深い関係を持っていた1878年の実態を、広い視野で見れば近代都市社会の実態を露わにしているのである。

さらに、「モニエ街」連作に見て取ることのできる画家の視点を、同時代の他の画家と比較してみるならば、そこにマネの絵画的特性が浮かび上がってくるであろう。近代都市社会の実態を露わにするマネの描写の仕方は、印象派の主要な画家達が同じ近代都市社会の表層のみを楽観的に表したのとは決定的に異なっており、寧ろクールベのリアリズムやラファエリのナチュラリズムに共通した部分がうかがわれる。しかしながら、クールベやラファエリが地方の民衆や下層階級のみを近視眼的に捉えているのに対し、マネは近代都市社会全体を広く、均等に見渡すことで、その実態と本質を表している。発表者は、「モニエ街」連作に典型的に示された、このような広角かつ等価的な眼差しに基づく近代都市社会の実態の描写にこそ、マネ独自のリアリスティックな特性がみられると考えるのである。